キリスト教信仰論序説

小島一郎

目次

はじめに
I　宗教と信仰
一　宗教
(1)　キリスト教と宗教
(2)　日本の宗教的状況
(3)　宗教と宗教心
二　信仰
(1)　啓示と宗教
(2)　イエス・キリストにおける啓示
(3)　啓示への応答としての信仰

II　イエス・キリストを信じる信仰

一　信仰の本質

(1)　人格関係としての信仰

(2)　認識としての信仰

(3)　信頼としての信仰

二　イエス・キリストとの出会いとしての信仰

(1)　イエス・キリストと神の言葉

(2)　イエス・キリストと聖書

(3)　イエス・キリストの現在化

むすび

参考文献

はじめに

キリスト教信仰を考察する場合、その信仰内容の吟味考察と、信仰成立の根拠ないし信仰自体の本質の考察の二つが考えられる。

信仰内容の吟味とは、例えば、創造論（これは人間と世界の始原や生成のプロセスを説明するのではなく、人間と世界の存在の意味を、神と自分との関わりにおいて明らかにしようとするものであって、この世界をどう見るか、人間の本質をどうとらえるか、人生の意味や、男と女の役割をどう考えるのかなど、人間の本来あるべき姿を論じるもの）、救済論（生きる意味の喪失から来る実存的な不安や、エゴイズムその他の様々な欲望にとらわれ、本当の人間らしさを失っている現実の人間、つまり堕罪のもとにある人間をどのように本来あるべき人間に回復するのか、このために到来したイエス・キリストの救いの働きをどう理解するかを論じるもの）、教会論（キリスト者の共同体としての教会のあり方、礼拝・礼典や伝道・奉仕のあり方、信徒や教職の責任と使命、世界のキリスト教会の合同や一致の問題などを論じるもの）、終末論（人間の生との緊張関係にある死や死後のいのち、救いの完成と永遠の生命、この世界の将来や終末などを論じるもの）などの検討である。

これに対して、そもそもキリスト教信仰とは何か、その本質や性格的特色、並びにその成立根拠は何かなどの考察を課題とする神学的領域がある。これはキリスト教教義学のプロレゴメナ（序説）とも呼ばれ、その論議のたて方によっては、論者の神学的立場が明らかになると言う意味で、信仰内容をなす教義学各論にまさるとも劣らぬ重要な課題である。本稿は、このプロレゴメナに当たる部分を「信仰論序説」として扱いたい。

なお、今回は本格的に取り扱うことが出来なかったが、従来から日本のキリスト教神学の領域においては不充分であった「キリスト教と諸宗教の関係」や、特に信仰の特質の比較研究が、神学の課題としても重要な今日的意味をも

つことが認められてきており、「キリスト教信仰論」を論じるに当たっても「宗教の神学」の視点が必要であることを承知しているので、この点は後日を期したいことを付言しておく。

I　宗教と信仰

一　宗　教

(1)　キリスト教と宗教

「キリスト教と宗教」と言うとき、「キリスト教」と「宗教」は一応区別して考えられている。もちろんキリスト教も宗教であるが、宗教という概念を越えようとしている部分があるので、この面を強調するために「キリスト教は宗教ではない」と表現することがあるからである。

「キリスト教は宗教である」と言うとき、キリスト教も他の諸宗教と同様に一つの文化現象であること、聖なるものと関わる人間の営みの一つであること、したがって、絶対性などを主張できず、歴史と文化のなかで相対的な位置を占めるに過ぎないことを意味している。

しかしながら、キリスト教を、人間の本能的な欲求や生まれながら身に着けている能力、例えば「理性」や「宗教心」の産物とだけ見るのではなく、人間を越えた超越的実在との人格的な出会いとその導きによるもの、すなわち、「啓示」に基づくものと見る視点が存在する。

そこで、この神によって引き起こされる神との人格的な出会いを「啓示」と呼ぶとすれば、この啓示を受け入れ、これに応答することによって成立する宗教（キリスト教）を、「啓示」なしの人間の自然の営みとしての宗教と区別するのである。

ただし、キリスト教の真理は、無限の超越者が有限な人間イエスの姿で自己を現わし、見えず聞こえぬ神の言葉が、

目に見える聖書や耳に聞こえる説教として語られ、見えざる霊的な普遍的なキリストの体なる教会が、地上の組織と制度をもった信仰者の集団としてその地域の歴史、文化、社会の在り方との関わりでその独自性を現わすことのなかにその本質があるとされることからもわかるように、神の啓示は決して単に抽象的な超越的な真理ではなく、わたしたち人間の生活と深く結びついている出来事であることを見逃すことはできない。つまり、現実には、ここにキリスト教という一つの宗教が存在しているのである。

啓示への応答としての信仰もまた聖霊に導かれた人間の営みであり、そこに神の恵みによって生かされる「宗教性」を認めることができるわけで、これを教会やキリスト教学校の中で具体的に大事にしていくことがむしろ今日の課題であろう。

結局、「宗教」という言葉には、ご利益宗教に代表される「人間の自己実現の手段としての宗教」という意味が付き纏い、キリスト教のように神の啓示への応答に生きようとする信仰の在り方をも宗教と呼ぶことには躊躇を感じさせるが、神の恵みの働きかけに対する人間の責任と課題を思うとき、これらは文化の領域に属するので、キリスト教の宗教性を強調することも必要になる。要するに、宗教には二つの異なった意味が含まれていることに注意したい。そしてキリスト教もまた自己の弱さを知り、人間の自己実現の手段としての宗教に陥る危機に絶えずさらされていることを自覚している故に、宗教のもつ二つの性格的区別を絶えず明確にしたいのであろう。(1)

(2) 日本の宗教的状況

現代は第三次宗教ブームの時代と言われている。第二次大戦後の現世利益を求めて新興宗教が乱立した第一次宗教ブーム、高度経済成長期の創価学会、立正佼成会、ＰＬ教団、霊友会、生長の家などの「新宗教」が盛んになった第二次宗教ブームに対して、第三次はオイル・ショック以後の低成長時代の、若者を中心とした宗教ブームである。これは、管理社会への反発もあってか、異なった世界への関心が強く、ＵＦＯ、オカルト、テレパシーなどに興味をも

ち、SF的、呪術的、脱合理主義、超古代への回帰などが特色と言われる。(2)

もちろん、このような現象の背後に、一般の日本人の生活に深く根差した宗教的な日常性があることも見逃せない。聖書は依然として隠れたベスト・セラーであるし、人生論を中心とした仏教系の宗教書などもよく読まれているという。

誕生、成人（七五三も含め）、結婚、死などのいわゆる通過儀礼にも宗教的なものを残している。

年中行事では、正月の初詣で、節分の豆まき、四季の祭礼、縁日、御盆、春秋の彼岸と墓参、クリスマスなど、信仰や信心のあるなしに関わらず、本来は宗教的な営みであるものに触れている。

政教分離の憲法を持つわが国で、数年前の夏、内閣総理大臣以下閣僚が揃って靖国神社に公式参拝をしたために、国の内外から激しい批判が相次いだことは記憶に新しい。

地鎮祭や山開き、海開き、プール開きまで神官による御祓いが行なわれる。

その他、商売繁盛はもち論、交通安全、合格祈願、縁結びや安産祈願、病気や厄払いの祈願、絵馬奉納、御神籤による縁起占いなども盛んである。神社・仏閣に行かなくても、「叶わぬ時の神だのみ」式の神仏への祈願は意外と多いのではないか。

また、日本は重層性の社会であるといわれるが、現代に原始宗教の名残りが見られるのも興味深い。

例えば、新車を購入したとき「御魂入れ」と称して、神社で拝んで貰う人がいる。アニミズム（精霊崇拝）である。エレクトロニクスを始め、ハイテクを駆使して製造された車に、「交通安全」の御札やお守りがぶら下がっている。フェティシズム（呪物崇拝）である。一、二度続けて事故を起こしたりすると、占いやまじないをしたり、縁起を担いで、せっかくの新車を取り替えたりする。シャーマニズムである。日進月歩の近代的自動車生産工場の敷地内に、お稲荷さんの祠があったり、側の杉の大木にしめ縄が下がっていたりする。自然崇拝である。

これらの宗教的な営みはすべて、不幸や災害、病気や死を恐れ、不安や孤独を逃れて、ひたすら幸福と繁栄、健康と成功にあずかりたいという人間の、生の本能や欲望から出ていると考えられる。

もっとも、冒頭に触れた第三次宗教ブーム（ここでの宗教現象を「新・新宗教」と呼ぶ人もある）の若者たちは、直接的なご利益というよりも、心霊との交流とか、瞑想による超常体験などに興味を寄せ、一種のミステリー遊びの傾向を示し、心理的・身体的な解放感や爽快感を求めているように見られる。(3)

(3) 宗教と宗教心

もちろん、宗教にはこのような人間の欲望を露骨に現わした原始的なものや、ゲーム化・遊戯化した刺激を求めるものばかりではなく、日本の文化を支えてきた伝統的な仏教や、現代社会の問題と真剣に取り組んでいる「新宗教」も存在することは周知の通りである。

いま、これらをひとつひとつ取り上げて論じることは出来ないが、これらに共通する宗教の構造や性格を考えてみたい。

そこで我々の回りを見てみると、好奇心や遊び感覚で心身の刺激を求める若者を始め、わずかのお賽銭で家内安全・無病息災・商売繁盛まで祈願する男がおり、願い事や悩み事の解決を求めて、次々と宗教を遍歴する女もいる。美容や健康や精神修養のために座禅に励む人もあれば、豊かな宗教的情操を養い、人間関係を円滑にし、心の平安や確固たる信念を得るために寺や教会の門を叩く人もいる。自己の宗教を事業経営や仕事のなかに積極的に生かそうとする人や集団もある。

いずれも、自己を向上させ、生活の充実と安定を図り、幸福を追及すると言う点では同様である。人生の充実ないし幸福の追求という場合の意味・内容において相違はあるが、これらを手に入れる手段として宗教を利用している点は共通である。即ち、まじないや迷信的なものから、高度に発達した宗教に至るまで、あるいは原始宗教から新・新

宗教に至るまで、宗教と呼ばれる以上、人間を越えたある超越的な存在や霊力に頼るかたちをとっているが、要するにそれ等の宗教は、人間生活に役立つことが求められ、人間のために作り出され、利用されているという現実がある。

また、反対に、宗教を利用することはもち論、宗教の必要性さえ否定する人々の存在することも認めなければならないが、この、宗教を否定する人々の中にも、宗教心や宗教性が存在することを指摘する神学者の発言を無視することはできない。

例えば、P・ティリッヒは人が既成の宗教を信じていなくとも、彼の「究極的関心」の対象こそ彼にとっての神であるという。(4) 金銭、権力、愛情、知性、自分自身なども「究極的関心」の対象になり得るので、これらを絶対化するとき、それがその人の神となる。人は無意識、無自覚のまま、何か有限なものを究極的なもの、すなわち神に仕立て上げて、それを拝んでいることがある。拝んでいるという意味は、その時、人はその「有限な神」に拘束され、支配されて、真の自由を失っているということである。

この意味では、人は誰でも、特定の宗教を信じていようといまいと、宗教的に行動しているということになり、宗教心をもっていると言える。しかもそのことによって、人は自己中心的、自己拡張的、利益追及的であることをまぬかれないばかりか、むしろそれ等を助長していると言わなければならない。もちろん、すぐれた宗教の中には、自己の欲望と戦い、わがまま勝手な自己実現を否定して、「無」のなかに真理を求めるものもある。しかし、そこにも、自力・他力を問わず、究極的には人間の自らの力（悟りや宗教的認識力や修業の成果）への依存を認めざるを得ない。つまり、宗教的営みの主体はあくまでも有限な「自分」であり「人間」である。それ故にここでの宗教行為は人間の有限性を越えられない。ここでは、救いや成仏は単なる人間の願望に過ぎない。人間を越えた聖なるものを追及し実現しようとする宗教が、あるいは、自分とその存在に真の意味を与える筈の「究極的関心」が、何故このように無力であり、歪められており、本来の救いの働きをしないのであろうか。

この点について宗教改革者のJ・カルヴァンは、神が人間の創造に際して、人間に「宗教のたね」を授けられたので、すべての人間は「宗教心」を与えられ、神を信じて神との喜ばしい信頼関係を保つことができた筈であったとして、人間の宗教心ないし宗教性の普遍性を認める一方、人間が神に背き、罪を犯した結果、人間はもはやこの「宗教心」を十分に、しかも正しく発揮することが出来なくなってしまったことを強調する。[5] 今まで見てきたように、宗教心が自己中心的に利己的に働いたり、誤った自律性の主張ないし超越者否認の態度によって、わたしたち人間が宗教的傲慢に陥ってしまうのはこの堕罪の結果であると言うのである。

それ故に、人間に内在する「宗教心」によって「人間から神へ」という道は人間の罪によって閉ざされており、成り立たないと結論せざるを得ない。それでは神と人間の関わりとしての宗教は、いっさい成り立たないのかと言えば、そうではない。「人間から神へ」という道は成り立たないが「神から人へ」という道が存在するのである。これが「啓示宗教」の道であり、信仰によってのみ成り立つ宗教がここにあるのである。

二　信　仰

(1)　啓示と宗教

罪のもとに生きている現実の人間は、自らに内在する宗教心によって神と出会うことが出来ず、ただ神からの啓示によってのみ「神と私」という人格関係を成り立たしめられ、この啓示への応答として、「新しい宗教」が生まれると述べた。この「啓示」のリアリティーを、わたしたちの生き方の問題として考えてみよう。

例えば、「私は生きている」という事は一つの事実である。「私は生かされている」というのも一つの現実ではないだろうか。第一、私たちの命は自分で作り出したものではなく与えられたものである。そして、やはり自分のものではない空気や水や緑の自然などの「お陰で」生きている。だから「生かされている」。家族や友人たちを始め、見ず知らずの多くの人々のお陰で自分の衣食住が支えられ、生活が成り立っている。つまり「生かされている」のである。

即ち、自然の恩恵、歴史・社会・文化の恩恵、有名・無名の無数の人々の恩恵を受けて私たちは生きているのでありそれ故に、「生かされている」のである。この「生かされている」という事は、自分の力で「生きている」という思い上がった生き方を、ただ謙虚に言い換えただけではない。そこには、もうひとつ別の現実が言い表わされている。

「生きている」というのは、自己の存在を中心に据えて、自己の生命の充足を求め、自己に必要なものをあくまでも追及し、宗教さえも自己のために利用する生き方である。これに対して、「生かされている」というのは自分への様々な恩恵と愛がなければ、自分は存在することも出来ず、生きることもできないという事実を、感謝と畏れをもって受け入れている生き方である。

ここに、今までとは違った「新しい宗教」の可能性がある。宗教の可能性と言ったのは「自分を生かすもの」が、自然や家族や社会や文化そのものないしその恩恵ではなく、それらの背後から、それらに意味を与え、それらが真に生きるように働きかけておられる「人格的実在（神）」こそそれである事を認める所に成り立つ現実だからである。

しかも、私たちが宗教的価値やご利益を求めることにおいて成り立つ人間中心の宗教ではなく、超越的実在としての神の方から私たちに呼びかけ・語りかけ・働きかけて、人格的な信頼関係を成り立たせて下さる神中心の宗教なので、「新しい宗教」と言ったのである。

人間の宗教心に根差した宗教と区別するために、K・バルトはこの「新しい宗教」をあえて「信仰」と呼んだ。そして、この「信仰」を引き起こす神の人間への働きかけを「啓示」と言って、その重要性を強調したのである。(6)

「啓示」は人間の応答を求め、そこに信仰、キリスト教信仰を生み出す。このキリスト教信仰は、具体的な歴史・社会・文化のなかでこれらとの深い関わりにおいて成り立つ。それ故に、キリスト教もまた人間とその文化に対して「超越性」と共に「内在性」をもつのであり、この「内在性」の面からすると、キリスト教も「宗教」だと言われることは冒頭の「キリスト教と宗教」の項で触れた通りである。

要するに、「啓示」は「宗教」を生みだすが、反対に、「宗教」は「啓示」を生みだす事は出来ないのであり、この意味で「啓示」と「宗教」、「キリスト教」と「宗教」は区別して考えたい。

なお、「生かされている」という信仰は、「啓示」に基づく以下の三つの自己理解、すなわち、「わたしは神に創造された」という、自己の本質存在の意味と根拠が自分自身からではなく、神からきているという「創造論的」自己理解と、「わたしは神（キリスト）に救済された」という、今まで神に背いていたわたしの罪が赦され、断絶していた神との関係が回復されたという喜ばしい「救済論的」自己理解と、「わたしの救いはやがて完成する」という、現実にはなお罪深く信仰弱い存在ではあっても、既に自分は神に属する者であり、神の国到来の時には永遠の生命が与えられるという希望に生きる「終末論的」自己理解よりなること、換言すれば、「救済史的自己認識」をその内容とするということができようが、小論では、これ以上啓示内容に立ち入ることは差し控えなければならない。

(2) イエス・キリストにおける啓示

神の啓示についてE・ブルンナーは次のように言う。

「聖書の啓示には、神自体と言う教理、人間自体と言う教理は含まれていない。聖書の啓示は、神をつねに〈人間への神〉として、人間をつねに〈神からの人間〉として見ている[7]」

神の啓示は、託宣のように、突然神秘的にひらめくのではなく、「聖書」を通して人格的に「神の言葉」として語られるのであるが、後述するように、「聖書」を「聖書」たらしめるものは「イエス・キリスト」である。「イエス・キリスト」こそ神の啓示そのものである。啓示の担い手でありつつ啓示内容でもある。何故そう言えるのかを示すのが、先のブルンナーの言葉である。

神は人間と無関係に存在したり、人間を無視して独自に活動される存在ではなく、〈人間への神〉として、つねに人間と関わりをもたれる方である。この〈人間への神〉という神の「あり方」を決定的に明確に示す存在が「イエス・

キリスト」にほかならない。イエス・キリストこそ〈人間となられた神〉であり、〈人間への神〉である。イエス・キリストにおいて、神は御自分の意志を人間に示され、その救いと愛を現実化され、終わりの日の完成を約束される。〈人間となられた神〉において、まさに「神」が「神」となられたのである。

このイエス・キリストは〈人間となられた神〉である故にまた、〈神からの人間〉でもある。〈神からの人間〉としてのイエス・キリストは、わたしたち人間に対して、真実な人間のあり方を御自分の生き方を通して明らかにされる。人間は神との人格的な信頼関係においてのみ人間であることを、イエス・キリストは人間としてわたしたちに出会うことによって啓示される。〈神からの人間〉であるイエス・キリストによって、人間は神に「生かされる」存在となり、神に存在根拠をおく〈神からの人間〉とされる。

このように、イエス・キリストは〈人間への神〉であると共に〈神からの人間〉であり、人間に神の本質とその働きを啓示すると共に、人間性の本質と現実をも明瞭にすることのできる唯一の存在であり、従って、神と人間とを結ぶ真の啓示者である。

ところで、イエス・キリストだけが真の啓示であると言うことは、キリスト教だけが真の宗教であると言う主張であり、独善的ではないかと言う点に一言触れておきたい。

イエス・キリストにおける神の啓示は、自分だけが真の宗教であるなどと思い上がり、独善と優越感にひたっている宗教としてのキリスト教を真っ先に裁く。イエス・キリストの啓示はキリスト教も他の諸宗教と並ぶ一つの宗教であり、諸宗教と共に誤りの多い、弱い人間の信じる不完全なものであることを指し示す。(8)

イエス・キリストの啓示は、個人の信仰についても、その独善性と絶対化を厳しく否定する。イエス・キリストの啓示は、個人と団体の信仰を相対化し、その有限性を自覚させる。ここで初めて、人は自分を越えた存在に気付き、謙虚に上からの呼びかけに耳を傾けるように導かれる。

この意味では、すべての人間、すべての宗教は、イエス・キリストの啓示にふれなければ、真に生きることはできないと言ってよい。(9)

しかしこのことは、諸宗教の存在を無意味にするのではなく、イエス・キリストを通して神との生きた信仰を与えられた者は、他の宗教を通しても多くのことを学ぶことができ、そこに神との出会いを経験することもできるので、諸宗教の存在そのものを決して無視したり否定したりせず、その信者たちと良い交わりを保とうとするのである。

この関連で、もう一つのことを述べておきたい。

神の自己啓示は、イエス・キリストを通して行なわれるばかりでなく、自然や歴史を通しても行なわれるのではないか、と言う主張がある。イエス・キリストによらなくても、神は美しく雄大かつ精緻な自然の姿や人知を越えた歴史の動きを通して、自己を啓示されると言うのである。

これに対しては、カルヴァンの言うように(10)人間の神認識の能力は罪の支配のもとにあり、著しく壊敗してしまっているので、おぼろげに、つまり、神の存在を全く否定できない程度には働くけれども、神との人格的な信頼関係を結ぶことは不可能であり、従って、自然や歴史のなかに神を見ることも、自然や歴史を通して神の救いにあずかることも不可能と言わなければならない。

しかしながら、ひとたびイエス・キリストを通して神と出会った者は、この神が自然や歴史や文化を通しても、みずからを豊かに現わされることを、「信仰」によって認めることができるのである。

イエス・キリストの啓示は、自然、歴史、文化、宗教などを無限定に神と結び付けることをしないかわりに、信仰においてこれらを正当に位置づけ、それらの意味を承認・評価する。要するに、イエス・キリストの啓示はこれを受け入れる者を狭い見方や立場に押し込めるのでなく、かえって、人間と世界に対する自由で広く深い洞察と理解へと導くものであるということができる。

(3) 啓示への応答としての信仰

神の人間への啓示に対して、人間は応答を求められる。この人間の応答によって、神と人間との人格関係が成立する。そして、この神と人間との人格関係を「信仰」と呼び、この信仰が歴史的に展開したものがキリスト教と呼ばれる宗教であることは、すでに述べた通りである。

さて、啓示を受容し、これに応答する場合に、神の働きと人間の受容能力の関係について、従来「啓示」と「理性」と言うテーマで論じられた問題点を項目的に挙げておこう。

1　理性の範囲内で啓示を理解するイギリス啓蒙主義の代表者J・ロックは、啓示は超理性的であることを認めながら、反理性的な啓示を否定する。ロックは、啓示が人間の自然的理性の到達できない真理を、人間に伝達するものであることを認めつつも、啓示が伝達するものが果たして神に由来する真理であるかどうかを判断するのは理性であり、理性による論証を越えるものは蓋然性しかもたないとして、究極の規準を理性においた。ここでは人間の自然的理性が神の「啓示」よりも優位にある。(11)

2　P・ティリッヒは一方では、啓示の真理と理性を同一視して啓示を理性のなかに解消することに反対するが、他方、啓示と理性を峻別して、啓示の真理を受容する理性の可能性を一切排除する立場にも反対する。

ティリッヒによれば、神の啓示は、人間の実存より発せられる「問い」に対する究極的な「答え」として与えられるもので、「問い」と「答え」は「相関関係」にある。神からの啓示は、人間の受容の仕方にかかっていると言ってもよく、人間が「問い」をもっていない場合には、神の啓示は何の意味ももたないのである。人間の実存をかけた「問い」はすぐれて「理性的」であるから、ティリッヒの「相関の方法」は、「啓示」と「理性」の「相関関係」として理解されていると言ってよい。(12)

3　E・ブルンナーは、人間には神の啓示を受容し、これに応答する能力が「残っている」と言う。人間に本来備

わっている神への「応答可能性」は、人間の堕罪によっても失われることがなく「残されている」というのが、カルヴァンの「イマゴ・デイ imago Dei の残り」のブルンナー的解釈である。(13)

この神の啓示への「応答可能性」Verantwortichkeit こそ、神と人間との「結合点」Ankniipfungspunkt であり、これを否定すれば人間は動物と異なるところがなくなるというブルンナーと、「結合点」を認めないK・バルトとの間に激しい論争のあったことは有名である。

4　人間の自然的応答可能性を否定し、神と人間との「結合点」が人間に内在することを否認するK・バルトは、当然のことながら啓示の受容能力は人間自身には無いと言っているのである。(14) 人間における啓示の受容もまた神の働きであり、神の恵みであって人間の能力や働きではない。したがって、啓示への応答としての「信仰」もまた、神から与えられるものである。

またティリッヒの「相関の方法」に対しても、神の啓示は人間の「問い」に対する神の「答え」ではなく、神から人間への「問い」であり、恵み深い呼びかけであり、それ故に誠実な「答え」が求められるが、「答え」もまた神からの賜物であるとして、バルトは神からの一方的な啓示を強調する。

以上の四人の思想家・神学者たちはそれぞれ異なった思想的・神学的立場に立っているので、単純に比較することはできないが、啓示とその受容をめぐっての強調点の相違を見ることはできよう。

これによって、信仰の理解にも微妙な相違が見られるが、以下では、基本的な問題に限って考察をすすめたい。

II　イエス・キリストを信じる信仰

一　信仰の本質

「ハイデルベルク信仰問答」の「問い21」に「まことの信仰とは何ですか。答え　それは、神が御言葉によって、

我々に現わしてくださったことを、みなまこととする堅固な認識だけではなく、聖霊が、福音によって、わたしのうちに起こしてくれる、心からなる信頼のことであります。（後略）」とある。要するに、信仰とは神に対する認識と信頼だというのである。そこで、ここでもこの線に沿って、啓示への応答としての信仰の本質を、神との「人格関係」、「認識」、「信頼」の三点から考えることにする。

(1) 人格関係としての信仰

信仰を神と人間との人格関係としてとらえるとき、「信仰」に似て「信仰でないもの」が明かになる。

まず、信仰とは「漠然と神の存在を信じること」ではない。「何者のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」の古歌に見られるように、正体不明のまま、聖なる雰囲気に宗教的情緒が感応するのが信仰ではない。信仰は、明確な人格的実在との出会いの関係である。

第二に、信仰は固定観念、独断、信念などとも異なる。信仰は決して思い込んだり、決め込んだり、固い信念を持つことではない。人格的な信仰は人間を狭い、固定的な考えやさまざまな束縛から解放し、自由な、幅広く柔軟な思考や感性を生みだすはずである。

第三に、信仰は「知性を犠牲にして信じこむこと」ではない。これは迷信への道である。後述するように、信仰は認識であり、知性の働きを大切にする。

もちろん、キリスト教にも奇跡、処女降誕、復活など、不可解・不合理と見える教理や論理があるけれども、これらも決して知性を無視して信じるのではなく、むしろ信仰の論理に従って知性を働かせるとき、常識を越えた真の認識に達することができるのである。

第四に、「過度の熱狂、狂信的な興奮や恍惚状態」は正しい信仰ではない。信仰にはある程度の情緒の高揚や情熱的な行動が伴うものではあるが、人間として互いに理解したり共感し合えることが大切で、これを越えたら要注意で

ある。

最後に、「キリスト教の教理・思想の理解や承認」が、そのまま信仰なのではない。信仰には、知性的な理解は重要な要素ではあるが、キリスト教界の消息、聖書的真理や思想・教理の体系などを情報として、あるいは学問として理解していることが、即信仰ではない。

それでは、信仰とはどのようなものであるのか。

信仰とは、イエス・キリストを通して自己を啓示される神に対する人間の、全人格的な応答の行為である。全人格的な行為とは、知性、感情、意志の三つの働きを統合した営みということである。私たちの経験できる「愛する」という人間同志の人格関係においても、知性・感情・意志が調和をもって働くのが健全であるように、「信じる」という人格関係も同様な構造が神と人との間に成立するのである。このいずれが欠けても健全な信仰は成立しない。知性が欠けると真理の追求という面が弱くなり、生き生きした神認識や自己認識が不可能になる。情緒性がなくなると情熱や暖かさに欠け、意志が弱いと継続性や道徳性に欠けた信仰になる。

人格的存在としての神が人格的存在としての人間にみずからを啓示されるとき、神は同時に人間が神に応答することのできるように導かれる。この神の啓示に応答するとき、神との人格関係が成立するのであるが、それはとりもなおさず、啓示によってその人間の生き方、在り方に決定的な変化が生じるということを意味する。すなわち、具体的には、罪の赦しに基づく救いの実現と「神のかたち」imago Dei の回復である。

(2) 認識としての信仰

E・ブルンナーは「神と人の関係の本質部分に認識がある。人間が神を認識せざるを得ないように、神は関係し給う。」[15] また、「人間の神認識は、神がみずからを認識させ給うことに基礎づけられている」[16] と言う。

ここには二つのことが指摘されている。

まず、神と人間との人格関係のなかで、その本質部分をなす神認識は行なわれるということ。

第二は、この認識は神の啓示に基づいており、神の恵みのみ業であるということである。

そこで、神と人間との人格関係のなかで神認識が行なわれることについて考えて見たい。

「人格関係における認識」を「人格的・主体的認識」と言うことが出来ようが、これは一つの大事な意味を持つ認識方法である。

神認識には、人間が信じようと信じまいと人間の状態の如何に関わらず、神は厳然として客観的に存在するのであり、有限な人間によって証明されたり、否定されたりすることはないという「客観主義」が一方にあり、他方、「神は存在する」と人間が信じるときはじめて神はその人にとってリアリティーをもつので、神認識は結局は人間の自己認識であるという「主観主義」が存在する。

「客観主義」は神との人格関係というダイナミックな生きた信仰を危くするし、「主観主義」は神の超越的実在性を無視している。この「客観主義」にも「主観主義」にも陥らずに、二つの立場の対立を乗り越えた所に、神と人間との「人格的出会い」という「主体的神認識」の方法がある。

では、この「人格的・主体的認識」とは、具体的にはどのようにして可能となるのか。

まず、神と人間の「わたしとあなた」という一対一の差し向かいの人格関係のなかではじめて成り立つものであること。第二に、「わたしの生き方」との関わりのなかではじめて主体的に神を認識することが可能となることを明かにしたい。

第一の、「わたしとあなた」という人格関係のなかで神を認識するということは、神を自分と関係のない第三者として、つまり「三人称」で呼ぶことのできる存在として、客観的に認識しようとするのではなく、「一・二人称」の関係、すなわち、神がわたしに「あなた」と呼びかけ、呼ばれた「わたし」が神に「あなた」と呼びかえす、主体と主

体の出会いが成り立つとき、はじめて生きた人格的実在としての神を認識することが可能となるということである。

M・ブーバーと並んで「我と汝」の人格主義哲学を展開して、E・ブルンナーにも影響を与えたF・エーブナーが「人間は本来、神について第三人称で語ることはできない。……人はつねに第二人称で神を考える」[17]と言ったのもこの意味である。

M・ブーバーから学ぶことは、「わたしとあなた」という人格的な関係が、人間と社会の基本的な関係のはずであるのに、現実には、「人と人」との間にこれが成立せず、むしろ「わたしとそれ」という、「人と物」の関係になっていることに気付き、人間同志の交わりに真の人格関係が成立するためには、「永遠の汝」としての神との交わりが必要であることを認めることである。[18]

わたしたちはしばしば隣人を自己の欲望充足の手段として利用することがある。これは人格的存在である隣人を道具化し、物品化し、非人格化していることで、「わたしとそれ」の関係である。

神とわたしたちの関係も同様である。神をわたしたちの欲望や幸福実現の手段として道具化し、商品化さえして、安産の神、交通安全の神、商売繁盛の神、学問の神などとして利用するとき、わたしとこれらの神々との関係は「わたしとそれ」という非人格的な関係になっている。

生ける人格的な神は、わたしたちを愛する余り、自らへりくだってわたしたちに仕える「僕の姿」さえおとりになる方であるが、決してわたしたちによって手段化されたり、道具化されず、非人格化されることのない、自由な主体的存在であり、従って、三人称で呼ぶことはできず、客観的に考察も認識もできないのである。

主体的な出会いによる神認識は、具体的には礼拝に於ける説教を通し、聖書を通し、あるいは祈りのなかで神がわたしたちに語りかけて下さり、わたしたちがそれにお答えすると言う、神とわたしたちとの対話において可能となるのである。

第二に、「わたしの生き方」との関わりでの神認識とはどういうことか。

まず、自己の生き方ないし人生観と無関係に神認識を試みることは無意味であり無駄であるということである。自己の人生の意味、自己にとって人を愛すること、学問や職業に携わることなどの意味や目的を考えずに、つまり、自己の人生の問題を棚上げにして、ただ神の存在や本質を論じてみても、それは抽象的な空虚な議論でしかない。

自己の人生の意味を深く問い、自己のアイデンティティーを真剣に追及するなかで、人は神と出会うことができる。自己認識と神認識とは互いに深く結び合っているのである。

カルヴァンは「キリスト教綱要」の冒頭、第一篇「創造主なる神を認識することについて」において、「神を知る知識と我々自身を知る知識とは、結び合ったことがらである。また、どのようにして、この二つは、一つになっているか」という一章を設け、その第一節で「自分自身を知ることなしには、神を知ることはできない」ことを論じ、第二節で「神を知ることなしには、自分自身を知ることはできない」と述べているのは、極めて示唆的である。[19]

さらに、「わたしの生き方」との関わりで神を認識するという場合、それは、神についての情報や知識を得ることではなく、私の生き方や在り方、あるいは私の運命と深く結びついていることであるので、「神認識」は、取りも直さず、一つの態度決定であり、わたしの人生に質的変化・転換が生じることを意味している。

例えば、「神を知る」とは、神がわたしを愛しておられることを受け入れることであり、当然、喜びと感謝をもって、この神の愛に答えて生きる新しい人生が始まることであるし、神が聖なる方であることを知るとき、わたしは恐れをもって罪の赦しを乞い、今の生き方を悔い改める者になるだろう。

「G・マルセル流に言うと、哲学に於ける『知る』は、『所有』の秩序にではなく、『存在』の秩序に属するのであり、人間自身の完成に関わっているのである」[20]において、「哲学に於ける『知る』」を「信仰に於ける『知る』」と言い換えれば、即ち「神認識」はまさしく『存在』の秩序に属しており、知識の獲得の問題ではなく、人間の在り方・

生き方の問題なのである。

(3) 信頼としての信仰

信仰は、一方では神とその働きを理解し、これを真実とし、真理として承認し、感謝をもって受け入れること、すなわち「認識」であるが、他方、この人格的実在との人格関係そのものでもあるわけで、これを「信頼」と呼んでいる。

M・ルターは信仰とは本質的に「信頼」であるとして、彼の書いた「大教理問答書」、「小教理問答書」では、「信仰」と「信頼」をほとんど同義語のように用いている。[21]

この点でJ・カルヴァンは「ジュネーヴ教会信仰問答（問い14）で、「それ故、神への真の信頼をもつ礎は、神をイエス・キリストにおいて知ることです」と述べ、「認識」が「信頼」の根拠であると教えている。

これは、「認識」なしの「信頼」は、盲信や迷信などの誤った「信頼」に陥り易いことを指摘しているのであるが、次の言葉は、正しい「認識」は、真実の「信頼」へとわたしたちを導くものであることを示している。それは「神を知ることの目的は、第一に、彼を恐れ・彼を敬うことを我々に教え、第二に、それに教え導かれて、いっさいの善きものを彼に求め、そして彼から受けたものを彼に帰することを学ぶにある」[22]というもので、要するに、「認識」の目的は「信頼」であると言うことができる。

では、具体的に、神への信頼とはどのようなものであろうか。

第一に、神の愛と真実に、自己のすべてを「委ねる」ことである。

「委ねる」とは、すべてを無責任に神にまかせてしまうことではない。わたしたちの責任や役割や課題としっかり取組みながら、最終結果を神にまかせるのである。努力した結果、わたしたちの期待通りにいかなかったとしても、神はわたしに最善をなしてくださったのだと、我が身に起こる出来事を、感謝をもって受け入れるのが、神に「委ね

る」という「信頼」の姿である。

第二に、「信頼」とは、文字通り神を頼りにすることであり、自己の無力を素直に認めた上で、神の力強い助けを期待することである。「信頼」は自己の卑小さに決して絶望しないことである。

第三に、どんな逆境や困難のなかでも、神の愛と真実に包まれていることを信じて、不安や恐れにとりつかれず、「心安らか」でいることである。

最後に、「信頼」は、神を神として「崇める」ことである。

「崇める」とは、いっさいが神の恵み深い導きによることと感謝しながら、神のみ心に従順にしたがい、すべてのことを神のためにと、神に仕える姿勢で生きることである。神を崇めないということは、神をないがしろにし、自分の思いのままに、勝手に生きることであり、「信頼」の正反対である。

二　イエス・キリストとの出会いとしての信仰

(1)　イエス・キリストと神の言葉

神は人格的存在であり、人間も人格的存在である。人格的存在ということは、知性、感情、意志をもち、言葉を用いて、互いに愛に生きることができるということであろう。

ところが現実の人間は神を見失い、神の声が聞こえず、従って、神との信頼関係も失われている。

この神と人間との壊れた人格関係を回復するために、神は人間に言葉をかけ、言葉による働きかけをされる。この神の人間への語りかけは、歴史上の人物としてのイエス・キリストを通してなされる。それ故に、イエス・キリストは「神の言葉」であるといわれる。

イエス・キリストを「神の言葉」というとき、そこに二種類の言葉が意味されている。第一はイエス・キリストの「語られた言葉」であり、第二はイエス・キリストの「行なわれた言葉」である。

「語られた言葉」とは、文字通り、イエス・キリストが当時の弟子たちや民衆に語り、教えた言葉である。

「神からの人間」として神の真理を語るイエス・キリストの様子を、「人々はその教えに驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである」とマルコは記している。[23] イエス・キリストの「語られた言葉」は、まさに「神の言葉」であった。

第二に、「行なわれた言葉」とは、イエス・キリストの行為、あるいは生涯そのものが神の意志の表現という意味で「神の言葉」と受けとるものである。

この「行なわれた言葉」はイエス・キリストの存在、生活と行為そのものが、このわたしにとってどういう意味をもっているのかを理解することが求められ、このことを通して神からのわたしへのメッセージを心の耳で聞き取ることになるのである。

イエス・キリストの生涯を「福音」として描いている四つの福音書は、いずれもイエス・キリストの「語られた言葉」と「行なわれた行為」とを深く結び付けて「出来事」としてとらえている。イエス・キリストの誕生から始まって十字架と復活を頂点とし、昇天で終る生涯そのものを「イエス・キリストの出来事」と呼ぶ。「イエス・キリストの出来事」はすでに全人類への喜ばしい救いの「メッセージ」である。

こう考えると、「行なわれた言葉」を理解するためには「語られた言葉」に導かれなければならないし、「語られた言葉」をただしく聞き取るには、「行なわれた言葉」の真意を誤りなく受け止めていなければならないことになる。イエス・キリストの言葉と行ない、あるいは教えと生活とは、切り離すことができないからである。

ところで、イエス・キリストが神の啓示であるということは、イエス・キリストの御在世当時の人々が、イエス・キリストを通して「神の言葉」を聞いたというだけではなく、今日においてもイエス・キリストが「神の言葉」でなければならないはずである。すなわち、過去のイエス・キリストの言葉と行為を、どのようにして、今日、わたした

ちへの「神の言葉」として聞くことが可能であるのか、それが次の問題である。

(2) イエス・キリストと聖書

今日、イエス・キリストを通して「神の言葉」を聞くためには、まずイエス・キリストと出会うことが必要である。このイエス・キリストとの出会いは「聖書」によってなされる。聖書はイエス・キリストについて書かれた書物というよりも、イエス・キリストと出会うための書物といった方がよい。聖書は単に過去のイエス・キリストの言葉や行為の記録ではなく、いま、この時代を生きる者へのイエス・キリストよりの語りかけを聞くことのできる書物なのである。

このことをさらに明確化させるために、まず、聖書の成立過程から考えていきたい。

イエス・キリストが十字架上で死んだのち三日目に、すなわち日曜日の朝早く復活して弟子たちに現われて以来、弟子たちは毎週日曜日の朝、復活のイエス・キリストに会うために集まった。日曜礼拝の始まりである。ここでは旧約聖書が読まれ、この古い約束（旧約）の実現・成就としてのイエス・キリストの到来の意味が確かめられる。そのために、生前のイエス・キリストの語った言葉、教え、生活ぶりや奇跡的な出来事などが、直接見たり聞いたりした弟子たちによって証言される。集まった人々は、これらの弟子たちの話を聞きながら、あたかもイエス・キリストが今ここにいて、自分たちに語りかけておられるように感じて、否、現にここにおられると信じて大きな喜びに満たされた。事実、イエス・キリストは、弟子たちの証言を通して御自分を人々に現わされたのであり、彼等は確かにイエス・キリストを通して神の言葉を聞いたのである。

やがて、イエス・キリストの言葉や生活を直接証言できる弟子たちが次々と世を去るに従って、人々は言葉で語り継がれていることを記録するようになり、これらを日曜日の礼拝のなかで朗読すると共に、イエス・キリストこそ世界の救い主であることを他の人々に宣べ伝える目的もあって、イエス・キリストの生涯を描いた福音書と共に、イエ

ス・キリストへの信仰の表明、あるいは信仰生活や教会の在り方を教えた使徒たちの書簡などをまとめて書物の形に整えていく。こうして紀元一―二世紀のほぼ一〇〇年くらいの間に出来上がったのが今日「新約聖書」といわれるものである。従って、新約聖書は、イエス・キリストの復活後に成立した教会が、礼拝・伝道・信徒の教育などの、教会にとって最も基本的・生命的な働きのためにおのずから産み出した文書であり、その内容は要するに、「イエスはキリスト（救い主）である」というに尽きる。しかしながら、この聖書を読む者にとっては、「わたしはあなたの救い主である」というイエス・キリストの声を聞くことになる。

このように聖書の成立過程からすれば、イエス・キリストを証しする聖書は、教会が生み出した書物ということになるが、また別の観点からすれば、教会は聖書に証しされているイエス・キリストによって生み出され、導かれているということになる。つまり、教会は歴史を貫いて、いつの時代も、聖書を通し、礼拝を通して生きたイエス・キリストと出会い、このイエス・キリストの生命と働きを周囲の人々と分け合いながら生きているのである。

次に、書物としての聖書の性格を考えてみたい。

聖書は一冊の書物のように見えるが、実は三九巻の書物からなる旧約聖書と、二七巻の書物からなる新約聖書を合わせた、つまり六六巻の書物の集大成である。

旧約聖書はイエス・キリストの到来以前に既にまとまっていたもので、内容的には、律法、歴史、文学、預言などに区分することが出来る。口伝の文章化を含めて、これらの書物を書いた人々とその時代的、文化的背景はさまざまで、従って、その内容も実に豊かな多様性をもっている。

新約聖書はイエス・キリストに出会った弟子たちによって書かれたこと、その内容はイエスの伝記、使徒たちの活動や原始教会の歴史、使徒たちの書簡や教訓などからなっていることは、先にのべた通りである。ここでも旧約聖書と同様に、著者の個性や文化的背景の相違などが、新約聖書の書物としての多様性を生み出しているのを見ることが

できる。

しかしながら、古代の人々の生み出した多様な文書が、内容的な統一性をもっていることもまた見逃すわけにはいかない。

旧約聖書とか新約聖書と呼ばれる場合の「約」とは「契約、ないし約束」の「約」であって、翻訳の「訳」ではない。旧約聖書は神がイスラエル民族と結ばれた約束を描いており、この「約束」に基づいてメシヤ（救い主）の到来を待ち望んでいる所にその中心があるといってよい。

新約聖書はナザレのイエスこそ全世界を救うメシヤ＝キリストであると告白している。つまり、イエスにおいて神の約束（旧約）が実現・成就したのであるから、要するに、旧約聖書も新約聖書もその中心はイエス・キリストであり、六六巻の文書はこのイエス・キリストに於いて統一性を見出している。

この聖書の多様性と統一性の両面性を、文献性と規範性とか、古典性と正典性と表現することもある。文献性や古典性は、聖書が人間の文化的産物であり、一定の歴史的な条件の中で生み出された文書として、学問的な研究対象にもなるという見方を表わしている。

これに対して、規範性や正典性は、聖書の古典的文献性を十分認めながら、これを単なる人間の産物とだけは見ず、聖書記者の背後に神のみ手が働いて、そこに表わされるイエス・キリストを通して神の言葉が語られることを信じる立場である。この神の言葉が個人の生活と教会の信仰を導くので、聖書はキリスト教の真理の基準であるという意味で、聖書を「正典」canon と呼ぶのである。

ちなみに、「正典」という語は「葦」という意味のギリシャ語「カノーン」から来ており、葦が昔は「定規」に用いられたことから「規準」の意味を持ち、やがて教会や信仰の真理の「規準」の意味に用いられて今日に至っている。

つぎに、「聖書」と「神の言葉」との関係を考えておきたい。

「聖書」とは、イエスをキリストと信じる人々が生み出した書物、従って人間の言葉で書かれた書物である。この「書物」としての「聖書」と「目に見えない神の言葉」とは一応の区別が必要である。

この場合、「聖書」がそのまま客観的に「神の霊感によって書かれた誤りのない神の言葉」であると信じる立場がある。逐語霊感説という。これは聖書の正典性・規範性は十分に認めているが、その相対性や多様性・文献性を認めないことになり、聖書への自由な研究を制限したり、教理で聖書の豊かなメッセージを拘束してしまうことになろう。

これと反対に、聖書は人間の産み出した文書であるが、聖書のなかには神の霊感によって書かれた部分があり、「神の言葉」を含んでいるので、この部分だけ読めばよいと考える立場がある。近代主義とか自由主義と呼ばれる。この場合には、聖書を歴史的文献として読む人間の自由は確保されるけれども、聖書全体を正典として重んじる姿勢が希薄であり、信仰の真理の基準が曖昧になり、恣意的、人間中心的な読み方になってしまう。

「聖書」はそれ自体、客観的な「神の言葉」ではないけれども、「神の言葉」であるかどうかを人間が判断して取捨選択できるような書物ではない。「聖書」全体は神の霊感に導かれて書かれたもので、従って、神の霊感に導かれて読むときに、はじめて「神の言葉」として読むこと、いな、聞くことができる。「聖書」が人間の書いた書物であることを認めながら、この「聖書」に神の霊が働くとき、つまり人間の側から言うならば、わたしたちが信仰をもって「聖書」を読むとき、「聖書」全巻の何処からでも「神の言葉」を聞くことができるのである。聖霊によって「聖書」の言葉は「神の言葉」になるのである。

礼拝に於ける説教も、聖書に基づいて語られるならば、貧しい人間の言葉であっても、神の言葉として聞かれるのである。語る者も聞く者も、聖霊に導かれているからである。

M・ルターは、聖書を「キリストの横たわっている飼い葉桶」にたとえた。その意味は、聖書は飼い葉桶のように汚れた人間の言葉で書かれた書物であるけれども、その中にイエス・キリストが横たわっておられる限り、尊い書物

であるというのである。

また、E・ブルンナーは、聖書をレコード盤にたとえている。[24] レコード盤はそれ自体はただの円盤にすぎないが、これをレコード・プレヤーにかけると、素晴らしい音楽が聞こえてくる。聖書もただの人間の書物にすぎないが、これに聖霊が働いて、信仰をもって読まれる時、ここから生ける「神の言葉」が聞こえてくるというのである。

(3) イエス・キリストの現在化

さて、聖書から「神の言葉」を聞くということは、ただイエス・キリストの教えや生き方から人生の教訓を学ぶということではない。むしろ生けるイエス・キリストとの出会いを意味している。出会いとはつねに現在の出来事である。聖書には二〇〇〇年の昔にパレスティナのガリラヤ湖とエルサレム周辺で活躍されたイエス・キリストの姿がくっきりと描かれている。この過去のイエス・キリストが聖書を通して今日のわたしたちと出会って下さるという不思議な出来事が起こるのである。

このように、過去のイエス・キリストが今のわたしたちと出会って下さることを「キリストの現在化 repraesentatio」と呼んでいる。

キエルケゴールは過去のキリストとの人格的な出会いの成り立つことを「キリストとの同時性 Gleichzeitigkeit」といったが、キリストとの同時性こそ、彼にとってはキリストを信じるということであった。

キリスト教は過去のキリストを想起したり祭ったりする宗教ではなく、いまもわたしたちに語りかけ、人格的に出会って下さる、生けるイエス・キリストと共に歩む宗教である。

では「キリストとの出会い」としての「キリストの現在化」は、具体的にはどのようにして起こるのであろうか。

聖書を読んでいる場合、当然のことながら「わたし」が聖書を読んでいる。ところがそのうちに「聖書」がわたしに語りかけ、正確に言えば、聖書を通して「キリスト」がわたしに語りかける。ここに立場の逆転が起こり、わたし

の方がキリストにお答えしなければならないように導かれる。そこで自分の生き方を思い、悔い改めや感謝、喜びや平安、慰めや励ましが与えられる。キリストと出会ったことによって、私の生き方に、はっきりした変化が生じるのである。ひとつの決断とか、自己の人生に対する新しい態度決定ということが起こるのである。これがキリストと今出会っている証拠である。生けるキリストとの主体的・人格的関係としての信仰が始まっているのである。

この聖書を通してのキリストとの出会いは、礼拝において起るのが基本であるが、個人的な祈りや、日常生活の中でも起ることがある。つねに心の耳を澄ませていたいものである。キリストの呼びかけが聞こえるように。

むすび

キリスト教信仰とは如何なるものかについて、主観的独断に陥らず、抽象的神学論議にも走らぬように、しかもある筋道の通った実存的真理として、その糸口の所を取り上げてみた。

キリスト教信仰という超越性を持った真理を、すべての人に、自分への真理として、その意味を認めてもらうことは困難な事柄であるが、個別的でありつつ普遍的な人生の課題を、人間関係という水平なレベルを越えた所から考えて見るのも意味があるのではないかという問題提起もしたかったので、いわゆる神学論文とは幾分異なった形になったかも知れない。

文化の神学以来、解放の神学、女性の神学、希望の神学、政治の神学、教育の神学などいわゆる「所有格の神学」が現われているが、そして医療の神学や人権の神学、文学の神学などもあってよいと思われるが、いずれにせよ、キリスト教信仰とその真理が現代社会と文化に対してどのような貢献をなし得るかが問われており、その基礎作りのひとつがこの「信仰論」の試みといってもよい。

註

(1) この項は古屋安雄「宗教の神学」(第一章　なぜ宗教の神学か　第六章　宗教の神学の諸問題)、佐藤敏夫「宗教の喪失と回復」(第一章　宗教とは何か　第二章　宗教の終わりか)より多くの示唆を受けた。

(2) 「宗務時報」(文化庁) 73号　一九八六年八月号「戦後新宗教の変ぼうと新・新宗教の台頭」

(3) 「イミダス」新・新宗教の時代　一〇一八—一〇一九ページ

(4) 「組織神学」第一巻(下)「《神》は人間の有限性に含まれている問に対する答である。神は人間が根源的(究極的)に関心をよせるところのものを表わす名称である。人が根源的(究極的)に関心を寄せるものが人間にとって神となることを意味している」七七ページ

(5) 「キリスト教綱要」I・3・1　五五ページ

(6) Die Kirchliche Dogmatik, I/2, § 17 Gottes Offenbarung als Aufhebung der Religion, 2. Religion als Unglaube, SS. 324—356; 3. Die wahre Religion, SS. 356—397

バルトは「宗教の廃棄としての神の啓示」の第二小節で「不信仰としての宗教」を論じ(特に三二八ページ以下参照)、第三小節で「真の宗教」を論じている。バルトは、いかなる宗教も(キリスト教を含めて)それ自体で真の宗教などは存在しないとした上で、「義とされた罪人」という意味でだけ、「真の宗教」を言うことができると言う。(三五六ページ以下)

すなわち、神のイエス・キリストにおける啓示と救いのみわざを信じるとき、この信仰だけが個人と宗教を真実なものとすると言うのである。

(7) 「聖書の『真理』の性格—出会いとしての真理」四五ページ

(8) Barth, Karl, Die Kirchliche Dogmatik, I/2, SS. 357 ff.

(9) Ibid. SS. 358 ff.

(10) 例えば「キリスト教綱要」第一篇五章の一一—一五節は「自然において神を啓示されても、それは益にならない」、「自然における神の証しからは、結局何の益も受けることができない」など、イマゴ・デイ(imago Dei)に創造されたままの本来の人間ならば、自然を通しての神認識は可能であったが、堕罪のもとにある人間には、これは不可能であることをのべている。

(11) 「宗教の喪失と回復」九二—九三ページ
(12) 「組織神学」第一巻（上）八九—九三ページ
(13) Brunner, E., Der Mensch im Wiederspruch, S. 541—553
(14) Barth K., Die Kirchliche Dogmatik, I/2, S. 305 f.
(15) 「聖書の『真理』の性格—出会いとしての真理」五一ページ
(16) 同書　五〇ページ
(17) H・G・ペールマン「現代教義学総説」一二ページ
(18) 「孤独と愛」（野口啓祐訳）六—七ページ、一〇九ページ以下など。
(19) テイリッヒは、カルヴァンが「キリスト教綱要」の冒頭で「神認識」と人間の「自己認識」を結びつけていることを取り上げて、彼の神学体系の初頭において「相関的方法」Method of Correlation の本質を言表していると指摘しているのは興味深い。「組織神学」第一巻（上）九三ページ
(20) 稲垣良典「現代カトリシズムの思想」一八一ページ
(21) 「信条集」前編　八五—一七〇ページ
　特に「小教理問答書」では、「信頼は神を畏れ、神を愛すること」と言っている。（一五九—一六〇ページ）
(22) 「キリスト教綱要」I・2・2　五三ページ
(23) マルコによる福音書一章二二節
(24) 「我らの信仰」一六ページ

参考文献

Barth, Karl, Die Kirchliche Dogmatik, I/2, Die Lehre vom Wort Gottes, Prolegomena zur Kirchlichen Dogmatik, Verlag der Evangelischen Buchhandlung, Zollikon, 1938
Brunner, Emil, Der Mensch im Wiederspruch, Furche-Verlag, Berlin, 1937
稲垣良典「現代カトリシズムの思想」岩波書店　一九七一
「イミダス　一九八八」集英社　一九八八
カルヴァン「キリスト教綱要」（渡辺信夫訳）I　新教出版社　一九六八

「キリスト教人名辞典」 日本基督教団出版局 一九八六
「キリスト教大事典」 教文館 一九六三
佐藤敏夫「宗教の喪失と回復」 日本基督教団出版局 一九七八
「宗務時報」73号 文化庁 一九八六
「信条集」前編 新教出版社 一九七二
ティリック「組織神学」第一巻（上）（下）（鈴木光武訳） 新教出版社
「ハイデルベルク信仰問答」（竹森満佐一訳） 新教出版社 一九六一
ブーバー「孤独と愛—我と汝の問題—」（野口啓祐訳） 一九五八 創文社
ブルンナー「聖書の『真理』の性格—出会いとしての真理」（弓削達訳） 日本基督教青年会同盟 一九五〇
ブルンナー「我らの信仰」（豊澤登訳） 新教出版社 一九五一
古屋安雄「宗教の神学」 ヨルダン社 一九八五
ペールマン「現代教義学総説」（蓮見和男訳） 新教出版社 一九八二